

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12809

研究課題名(和文)『哲学大辞書』に見る近代日本哲学の自画像 知の制度化に関する日中共同研究

研究課題名(英文)"Tetsugaku Dai-jisyo" (A great dictionary of philosophy) and self-portraits of modern Japanese philosophy -- A Japan-China joint study on the institutionalization of knowledge

研究代表者

宮島 光志 (Miyajima, Mitsushi)

富山大学・大学院医学薬学研究部(薬学)・教授

研究者番号：90229857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は『哲学大辞書』(1909-12/26、同文館)の刊行事業を先導した井上哲次郎と桑木巖翼に焦点を当て、彼らが西洋哲学を日本の高等教育に導入し、日本の哲学界を形成すべく奮闘した事跡を「知の制度化」として浮き彫りにした。彼らは西洋哲学と東洋哲学の総合、哲学と隣接諸領域の架橋を強く志向していた。そうした統合性への志向は、今日の「国際性と学際性」を重視する知的状況に鑑みて、再評価しうる。近代日本国家の形成過程で「知の硬直化と形骸化」という悪弊も見られたが、緊密な「知のネットワーク」を基盤とする『哲学大辞書』は「知のパノラマ」や「知識人の自画像」として不朽の歴史的価値を有する。

研究成果の概要(英文)：This study focused on Tetsujiro Inoue and Genyoku Kuwaki who led the publication enterprise of "Tetsugaku Dai-jisyo / A great dictionary of philosophy" (1909-12/26, Dobunkan publisher). They struggled to introduce Western philosophy into Japanese higher education and to form philosophical communities in Japan, which is traced as "institutionalization of knowledge." Inoue and Kuwaki strongly intended to synthesize Western and Eastern philosophy, and to bridge philosophy and neighboring sciences. Their intention to such integration may be re-evaluated in view of today's intellectual situation, that emphasizes "international and interdisciplinary." Problems with "rigidification of knowledge" were surely seen in the formation process of modern Japanese nation. But "Tetsugaku Dai-jisyo," which was based on "network of knowledge," has everlasting historical value as "panorama of knowledge" and "self-portrait of intellectuals."

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：哲学大辞書 桑木巖翼 井上哲次郎 明治哲学 大正哲学 制度化

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は「近代日本哲学における 知の制度化 をめぐる総合的研究」の事例研究として構想されたものであり、年来の「日本の哲学辞典編纂史に関する研究」の新生面を切り拓く試みである。ドイツ啓蒙主義に関する概念史的研究の場合、研究教育の制度・組織としての大学、および情報伝達の制度・媒体としての哲学辞典（広くは出版文化）に着目した発展史的解釈が着実に成果をあげている。日本の近代哲学についても、明治大正期の広範な 知の制度化 という文脈に置き直して、新たな叙述が求められているのである。

(2) 長年にわたりカント人間学の概念史的研究に取り組んできた研究代表者(宮島)は、日本における 編集知の展開 をめぐって、「日本の哲学辞典編纂史に関する研究：三木清編『現代哲学辞典』の批判的検討」を遂行した。本研究はその過程で構想されたものであり、明治末期の『哲学大辞書』を分水嶺とする哲学辞典編纂史の大転換を 知の制度化 という視点から跡づける試みである。

2. 研究の目的

(1) 幸い今日では明治大正期の哲学辞典類が(復刻版のほかに)国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」として自在に閲読できる。そうした研究環境の向上に棹さして、『哲学大辞書』(1909-12/26[追加]、同文館)の資料的価値を再評価することが本研究の主たる目的である。浩瀚な同書の刊行は国家的事業という性格も強く、知の制度化 を証言する貴重な文化遺産と見なしうる。

(2) 特に同書の「追加」分冊(1926)には、井上哲次郎を頂点とする明治期の哲学界から弟子の桑木巖翼が領導した大正期のそれへと移行する、過渡期の知的状況が反映されている。近代日本の哲学界を担った哲学徒の群像と彼らが注目し格闘した哲学的な問題群を、『哲学大辞書』という象徴的な遺物を介して鮮明に甦らせることを本研究は目指している。同書に映現する「近代日本哲学の自画像」を多角的に分析する作業を通じて、延いては本格的な 知の制度化 論へと道を拓くことを本研究は目論んでいる。

3. 研究の方法

(1) いみじくもピョヴェザーナが指摘したように「この辞典は今日でも一種の哲学人名辞典として利用することができる。そこには朝永、波多野、姉崎、阿部その他の聞き慣れた名前の数々が記されている」(『近代日本の哲学と思想』1965)。そこに立項された古今東西の哲学者を精査するのと併せて、執筆者に名を連ねた重鎮や少壮の哲学研究者たちを精確に分類・記述することにより、本研究では「近代日本哲学界の地勢図」を描き出す。

(2) 本研究のモットーは「間口は狭くとも、奥行きは深く」である。すなわち、『哲学大辞書』という特定の出版物を入り口としながらも、同書の百科全書的な性格に鑑みて、本研究では近代日本哲学と 知の制度化 という問題圏の全体を縦横に検討する。例えば、出版文化と編集知、大学制度と哲学講座、学会組織と学会誌、ジャーナリズムと在野精神などが個別テーマとなる。その成果を改めて『哲学大辞書』の全体構成と引き比べて、同書の学術的意義と社会的影響力を評価する。

(3) 本研究は日中共同研究として展開される。日本側の研究メンバーは2014年9月に北京で中華日本哲学会と国際シンポジウム「近代日本・中国における哲学思想の再検討」を共催して、中国人の研究者と交流を図った。その際に宮島報告「『哲学大辞書』と明治期アカデミズム」に関心を寄せてくれた中国人研究者を研究協力者に迎えて交流を図り、中国の日本哲学研究者による同辞典の評価も検討材料に加える。

(4) 近年におけるデジタル人文学の動向に棹さして、『哲学大辞書』の検索可能 PDF 化を試みる。

4. 研究成果

(1) 2016年10月1日に廈門大学において、中華日本哲学会と共催で国際シンポジウム「東アジアにおける近代哲学の生成と展開 人文知の制度化 の観点から」を開催した。日本側からは宮島(桑木巖翼論)、森下(西周論)、加藤(井上哲次郎論)、及び川合(ジャーナリズム論)の4名が、近代日本における哲学形成を 知の制度化 の具体的な営為として分析的に論じた。他方で中国及び台湾側からも郭(吉田松陰論)、賀(政治論)、葛(進化論)、及び廖(田辺元論)の4名が、近代日本の哲学形成について報告を行った。さらに日本側からは李(清末民初中国哲学)と三谷(近代日本の美学・芸術学)が予稿集に寄稿した。また、日本側の3論文(宮島、森下、李)が中国語に翻訳されて、研究叢書『円卓』(人民出版社)に採録されることになり、総じて実り豊かな共同研究となった。

この国際シンポジウムに向けて、日本側では特に西周、井上哲次郎、桑木巖翼の3者を中心に据えて、明治大正期における近代日本哲学の生成と展開を 人文知の制度化 という統一的な視点からダイナミックに捉える努力を重ねた。その際には、取り分け中国の日本哲学研究者との対話を念頭に置いて、「東アジア(漢字文化圏)における日本哲学」を強く意識した研究を心がけることになった。こうした研究態度はそれ自体、近代日本哲学の草創期に和語・漢語・欧米語を相互に参照しながら哲学用語を鑄造した西周などの事績に思いを致すことであり、その当時、「新たに制度化され始めた人文知」の創成を

追体験することに他ならなかった。そうした意味で、今回の日中共同研究は極めて意義深いものとなった。

(2) 同シンポジウムの「開催趣旨」(宮島による起草)は、現代日本の知的状況を分析しながら《(人文)知の制度化》という問題圏を抉り出したものである。その全文を転載して、本研究の歴史的使命を後世に伝えたい。

「今日、日本の大学制度が根幹から揺らいでいる。25年前には全国の大学で教養部解体の嵐が吹き荒れたが、その成否を冷徹に見極めることなしに、今度は人文系学部の縮小再編が声高に叫ばれている。ここで広く「人間の文化的な営為」とその成果を人文知と呼ぶことが許されるとすれば、いまやそうした人文知が大方は「イノベーション」に寡欲であるとの理由で危機に瀕しているのである。

だが、日本の近代化のプロセスを振り返ってみると、近代以前の深く東洋の伝統に根差した知的遺産を継承しながらも、西洋の哲学・科学の移入という仕方で人文知の刷新が国家的な事業として推進された。近代国家の形成過程において人文知の制度化が喫緊の課題となり、国家の基盤形成の重要な部分を占めていた。そうした中で明治期には「殖産興業」や「富国強兵」と並んで「和魂洋才」がスローガンとなり、さらに大正期には「文化」や「教養」が国民生活の理想となった。戦時下に愛好された「日本精神」という問題性を孕んだ概念も含めて、日本の近代化における人文知の制度化を批判的に検討する作業は、現代日本における「人文知の危機」を歴史のダイナミズムの中で捉える上で、大いに意義を有するものと思われる。

ところで、上で略述した人文知の制度化が最も広範に推進されたのは、「知への愛」を原義とする哲学の分野にほかならなかった。例えば明治中期以降に出版制度が広く社会に浸透した結果、哲学辞典の編纂、哲学叢書の企画、翻訳書や教科書、学会誌や商業雑誌などが刊行されるようになった。それと軌を一にして教育研究制度も次第に拡充されて、官立と私立の諸大学で哲学系の講座が開設・改組された。また独自にカリキュラムが編成され(哲学概論と哲学史の定着)、在外研究制度の活用、学会組織の整備、講演会の開催などが定着した。このように人文知の制度化とは、哲学の研究教育に関わる「人材や手段」を新たに組織化ないし体系化する活動(基盤整備)であり、そうした制度的な枠組みの中で人文知に関わる情報交換と人的交流が活性化したのである。

こうして、当初は近代以前の各種制度を再編し、新たな知の地平を創出する動的な生成プロセスであった人文知の制度化が、今日では逆に硬直化し、危機に瀕しているのである。このシンポジウムの狙いは、中国文化の多様な相貌を今日に伝える廈門の地に

日中両国の日本哲学研究者が相集い、人文知の制度化について歴史的な認識を深める中で、東アジア全体の視点から「人文知の危機」を克服する手掛りを探ることにある。」

(3) 本研究では『哲学大辞書』刊行事業の中心人物である井上哲次郎と桑木巖翼に焦点を絞り、西洋哲学を日本の高等教育に導入した事跡を《(人文)知の制度化》の典型として浮き彫りにした。両者は東京帝国大学文科大学哲学科を拠点として日本独自の哲学界を形成すべく奮闘したが、その際に西洋哲学と東洋哲学の総合、哲学と隣接諸領域(社会科学と一部の自然科学も含む)の架橋を強く志向していた。彼らの統合性(知の総合)に対する志向は、今日の「国際性と学際性」を重視する知的状況に鑑みて、正当に評価されるべきである。なるほど両者が推進した《(人文)知の制度化》は近代国家の形成という目的と強く結ばれており、勢い「知の硬直化と形骸化」を招いたことは否定できない(井上哲次郎による教育勅語の哲学的基礎づけなど)。だが、近代日本哲学の草創期に緊密な知のネットワークを組織して具体化された『哲学大辞書』は、当時の(人文)知のパノラマや知識人の肖像(自画像)として現代でも不朽の価値を有する。そうした知の制度化の両面価値を、その担い手の事跡に即して浮き彫りにするという点で、本研究は一定の成果を挙げることができた。

(4) 本研究ではさらに元良勇次郎の存在にも注目した。浩瀚な著作集(クレス出版、2013-17年)の刊行事業も手伝って、元良は心理学に定位した知の制度化の立役者として脚光を浴びている。彼は『哲学大辞書』の刊行事業に携わると同時に、没後は同事典(追加)に立項されて功績を称えられもした。本研究ではさらに哲学内部の諸分野と隣接諸領域を担った主要人物にも注目して、彼らの功績と近年における再評価の機運を俯瞰した(大島正徳、朝永三十郎、高楠順次郎、姉崎正治、島地黙雷、渡辺海旭、浮田和民、谷本富、坪井正五郎)。なお、彼らが実際にどのような項目を執筆したかの調査は、今後の課題として残された。

(5) 研究協力者の川合大輔は『哲学大辞書』全冊の教育学関連項目に着目し、独自の基準により全項目をリストアップして吟味検討した。この試み(便宜上「川合モデル」と呼ぶ)は、同書の掲載項目を精査する方法論として優れており、その汎用性ゆえに、今後の応用が期待される。

(6) 宮島が着手した『哲学大辞書』の検索可能PDF化は、最終的に中途半端な試験段階に留まっている。まして各種の検索機能を備えたデータベースの構築およびその公開については、前途遼遠である。これらの作業に

については、今後、デジタル人文学の推進に向けた別の研究プロジェクトで、その実現を図りたいと念じている。

(7) 同じく今後の課題に属するが、名古屋哲学研究会の日本思想史部会を母体とする本研究組織は、メンバー各個の本研究課題に係る研究成果を独立した論考にまとめ上げ、それらを総合して、明治大正期の哲学思想に関する1書を編むべく、作業を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

宮島 光志、近代日本哲学与“知識の制度化” 探索桑木嚴翼の事迹[中国語=吳 光輝訳](邦題「近代日本哲学と 知識の制度化 桑木嚴翼の事迹を辿る」) 依頼有、円卓(中国・人民出版社) 2018(印刷中)

森下 直貴、西周的“區別-連接”の哲学 包摂“実証主義”思想与“天”の思想の体系[中国語=吳光輝訳]、依頼有、円卓(中国・人民出版社) 2018(印刷中)(原型論文は下記)

李 彩華、“知識の制度化”視野下の清末民初中国哲学在日本的传播、依頼有、円卓(中国・人民出版社) 2018(印刷中)(原型論文は下記)

森下 直貴、西周の《區別-連結》の哲学 「実証主義」と「天の思想」を包括する体系、浜松医科大学紀要、査読有、Vol.31、2017、pp.1-21
<http://hdl.handle.net/10271/3158>

津田 雅夫、「もの」と「無」 疎外について、(名古屋哲学研究会編)哲学と現代、査読有、Vol.32、2017、pp.56-66

李 彩華、知識の制度化 から考える清末民初中国哲学の日本における伝達状況、(名古屋哲学研究会編)哲学と現代、査読有、Vol.32、2017、pp.67-83
<https://drive.google.com/file/d/0B-bQ08HRWZxrTTlyS3E5c2xiNE0/view>

加藤 恒男、井上哲次郎の哲学・宗教・倫理学 人文知 に背馳する、(名古屋哲学研究会編)哲学と現代、査読有、Vol.32、2017、pp.114-160
<https://drive.google.com/file/d/0B-bQ08HRWZxrNUFCZkpTVGIsWk0/view>

宮島 光志、カントと桑木嚴翼 性格を哲学する、(石川県西田幾多郎記念哲学館編)点から線へ、依頼有、Vol.65、2016、pp.86-108

〔学会発表〕(計15件)

宮島 光志、近代日本における 知識の制度化 の足跡と立役者たち、名古屋哲学研究会・日本思想史部会(名古屋市) 2018

宮島 光志、[基調講演]近代日本哲学と 知識の制度化 桑木嚴翼の事迹を辿る、中華日本哲学会(中国・廈門市) 2016

森下 直貴、近代日本哲学における「理」の転回 西周から西田幾多郎へ、中華日本哲学会(中国・廈門市) 2016

李 彩華、知識の制度化 から考える清末民初中国哲学の日本における伝達状況、中華日本哲学会(中国・廈門市) 2016

加藤 恒男、井上哲次郎の哲学宗教倫理学 人文知 に背馳する、中華日本哲学会(中国・廈門市) 2016

三谷 竜彦：知識の制度化 から見た明治・大正期における美学・芸術学の状況、中華日本哲学会(中国・廈門市)、2016

川合 大輔、「ジャーナリズム」概念の変遷から読み解く 知識の制度化、中華日本哲学会(中国・廈門市)、2016

川合 大輔、『哲学大辞書』教育事項にみえる近代日本知識人の思想傾向、中部哲学会(富山市) 2015

〔図書〕(計2件)

津田 雅夫、「もの」と「疎外」、文理閣、2017、184

宮島 光志、津田 雅夫、森下 直貴、別所良美、李 彩華、(小関・後藤ほか編著)哲学中辞典[事項執筆]、知泉書館、2016、1390[156f,205,247,702ff,763f,833f,844f,1098f,1170f, etc.]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮島 光志 (MIYAJIMA, Mitsushi)
富山大学・大学院医学薬学研究部(薬学)・教授
研究者番号：90229857

(2) 研究分担者

津田 雅夫 (TSUDA, Masao)
岐阜大学・名誉教授
研究者番号：10144099

李 彩華 (LI, Saika)
名古屋経済大学・経営学部・教授
研究者番号：10310583

(3)連携研究者

森下 直貴 (MORISHITA, Naoki)
浜松医科大学・医学部・教授
研究者番号：70200409

別所 良美 (BESSYO, Yoshimi)
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：10219149

(4)研究協力者

加藤 恒男 (KATO, Tsuneo)

三谷 竜彦 (MITANI, Tatsuhiko)

川合 大輔 (KAWAI, Daisuke)

中国側の研究協力者として呉 光輝 (廈門大学・学外文学院・教授 / 中華日本哲学会副会長) 郭 連友 (北京日本学研究中心・教授 / 中華日本哲学会副会長) 両先生にお世話になった。記して謝意を表したい。